



# バタヴィア便り

安藤利男

この頃僕も愈々この風土、氣候に合ふ様になつた。その代りヒタイのあたりからビタ／＼とどす黒くなつて来たよ。朝顔を洗ふ時鏡を見る度に黒くなりやがつたと思ふ。従つて相手方の黒きブロンプア(女の子だ)の黒さが氣にならなくなつて来るといふわけだ。色は黒いが南洋ぢや美人といふのはありや本當だ。僕も歸る頃には前後不覺、齒の出てる方が顔だぞうだなんていふことになるかも知れない。何しろ直射の下で猛烈にテニスをする。こゝでは汗をどつさり流すことが一番よい健康法なんだから、白い奴は凡そ馬力のない奴等で半病人見た様なものだ。

こゝへ来て驚くことは、日本語と言葉の似合つたのが多いことだ。「あること」は「あだ」といふ、物がなくなつて探した時に彼等は「あだ／＼」といふ、濟んだことは「スダ」といふ、アダは英語の「あだ」だ、スダは過去を現はす助動詞だ、「トツカル」は「取換へる」にそつくりだし、「モンドル」は戻るといふ意味で殆んど同音だ。「めし」のことを「マカン」といふがこれは噛むにむか附いただけだし「飲む」ことを「ミノム」といふこれは「水飲む」と同じではない

號三十三第  
月六年五十和昭十  
行發日五・回一月每  
錢五金部一價定誌本一  
錢拾六金(共稅)年一  
助之幸川大 總發行發  
一ノ七西座銀區橋京市京東  
社信通盟同 所行發

人のことを「オラン」といふが「カヤト」とか「ムナト」といふ人の名前が多い、カヤトは金持の意だし、ムナトは洗濯屋のことであるが「手力雄命」とか「すさのの命」とかと日本の昔は言つたし今でも人といふ字は「ト」と讀む。

日本で「竹どん」とか「八どん」とか若い衆のことを呼ぶが、こゝでもジャバ語で「ドン」とは「手前」といふ意味である。この土人は自國のことを水の國と言つてゐる「タナ、アイル」(土地水)だ、日本は「みずほの國」といふからその觀念は同じではないかと思はれる。みずほといふのは水の穂即ち波で「海國日本」のことか又稻のことを言ふのかわらないけれども、豊葦原といふこともジャバでは葦原は非常に多い。今では葦ではなくて砂糖キビが葦原をなしてゐる。ジャバは水田が多いが「なわしろ」から「田植」の方式など日本のやり方とそつくりである。それから、こゝの支那人は日にあつても仲々黒くならぬが日本人は直ぐに黒くなるといふことも面白い現象である。僕は言語學者でないし、人類學のことは知らんけれども何か骨相や、風俗、言葉

情勢が騒しくなると「日本は何時遣つて来ますか、日本が来れば一律平等だ、第一税金が軽くなるし安い品物が買へるし」などと言つてゐる。土人のインテリ層だつて然りである。蘭人が自己の利益を擁護するために輸入制限や輸入許可制、高率關稅などをやつてゐるが、このため貧乏な土人には安くて良い日本品が手に入らない、だから土人議員は輸入制限を撤廢して日本品を自由に我等に使はせると叫んでゐる。日本の利益と、土人の利益とは同じ側にある、政治的にも大亞細亞主義的な理想は充分持つてゐる。

とにか、日本の立場は僅か二十數萬の白人を除く絶對多數の土人によつてバックされてゐる様だ、土人大衆の氣持を自然の間に把握してゐる様な感じが深い。この點強調だね。(四、三〇)

去る廿一日日本朝野の熱誠溢るゝ許りの歡迎裡に入京した中華民國國民政府答禮使陳公博專使格民誼副使等に隨行して來た中國記者團は六日間に亘り使節團の動向を自國に報道すると共に友邦日本の産業文化の諸施設を具さし視察し新東亞建設に邁進する支那日本に對する認識を新たにして廿五日使節團と共に退京した。一行の顔觸は汪精衛氏の機關紙中華日報南華日報を始め中央電訊社、南京新報、杭州日報の特派員で之に中華電影のカメラマンを加へた六名である。南京新報の秦墨晒は支那に於ける老練なる評論家我が國の著名な大陸評論家朝日の大西、日

## 中國記者の見た日本

東亞部 長谷川 仁

の周雨人君は嶺南大學出身、歸國後は中華日報の南京特派員として活躍すると云ふ新鋭である。新聞記者團は滯京中使節團とは別行動をとり、興亞院と同盟の計畫せるスケージュールに依つて新聞社、放送局、日産自動車工場、百貨店等を見學し、又我が言論界にも膝を交へて新東亞諸問題に就き種々意見の交換をなし、帝國ホテルの八社聯合懇談會には宣傳部長の林柏生氏も出席して腹藏無き所見を吐露して我が言論界の協力を懇請した事は今後の日支親善に寄與する處絶大なものがある事と信ずる。

我々同業者として彼等が日本に來て何を感ぜられたかは最も聞き度いところであつた。幸ひ記者は一行に同行してゐた爲種々彼等の意見を聞く事が出来た。一行は使節團隨行と云ふ肩書の爲一切自由の意見を發表する事を禁ぜられてゐたが、一行が退京するに際し左の如く其の所見の一端を披瀝した。

日の吉岡、同盟の横田の諸氏とは北京時代から舊知の間柄と云ふ日本通、又中央電訊社の張昭銘君は我が同盟の中南支總局華文部に於て活動した京大出身の新聞人、日本語の達者な事は日本人が顔負けする位、中華日報の穆時英君は新聞人と同時に流行作家として支那の青年男女の間に人氣ある若き文士、我が文壇の大御所菊池寛氏に非常に可愛いがられてゐると云ふ非常な可愛いがられてゐると云ふ南華日報の章建之君は昨年の東亞操縦者大會に維新政府記者團の一員として参加した錚々たる記者で高等師範を卒業、新聞記者としてペンを振ふ一方専門學校の教授として教鞭をとつてゐる、杭州日報

ならぬ。我々は日本人が心から中國を了解する事を望むと共に、我々は歸國後中國國民に對して日本の眞意を理解せしむべく努力する決心である。

### 支那は日本に何を學ぶべきか

周雨人氏

支那人が常に云ふ諺に「龍頭蛇尾」と云ふのがあるが、之は即ち事をなすには、其の始終を貫徹しなければならぬと云ふ事である。又支那の國歌に「一心一德貫徹始終」の一句があるが、現在の支那は未だ新中國建設の中途である事を必ず銘記せねばならぬ。我々が東京に來てから日本人が物事を貫徹しようとする熱意に燃えてゐる事を深く感じたが、之に反して中國人は此の精神が劣弱である。此の外中國は日本に學ぶべき點が多い。例へば日本の精神就中耐苦の精神は容易に知得出来るものではない。然し我々が日本を學ぶに際して注意しなければならぬ點は決して中國固有の國民精神を忘却してはならないことである。即ち支那の環境に即して之を探り入れることが大切であり、之に依つて始めて「非驢非馬」の状態から脱し得るのである。

### 日本の印象

章建之氏

一、日本政府當局及民衆に和平の誠意があること  
一、初夏新緑街市公園の如く誠に仙境に屬す  
一、街如何に雑沓すれ共秩序あり  
一、敬神の念非常に厚し  
一、新文化運動の氣象あり  
一、物資不足の氣象なし、但し統制強化の氣運濃厚  
一、婦人の服装が以前に比し華美に感ず(二十五、五、二十七)

# 北支から歸つて

外信部 齋藤 正躬

三年近い北京の生活から、東京へ歸つて見て、少なからず驚かさされたのは「銀座」だつた。

前線と後方とが、混淆してゐる様な北京の日本人風俗が、何となかにかかつてゐた私は、無意識の裡に、東京へ歸つたら又キノの美しさを認める事が出来る……等と淡い期待を持つてゐたのだが銀座を通るケバ／＼しい、毒々しい女のキモノを見て、幻滅所か寧ろ悲しくさへ感じたのである。

一體何でこんな派手な、没個性な恰好をしなければならぬのか何で食ひ物屋と、待合と、骨董屋が繁昌しなければならぬのか、戦争の重苦しさから脱れ出る物の利那的な氣持か、教養を知らぬ俄成金の没趣味か、何れにしても、戦争を経験した我々には決して快く映らない事は事實である。

三年間十二回の従軍、四回の出張が私に教へた物は必死の精神と不足な生活に堪える事であつたのだが、そんな異常心構へは總て現在の日本の苦悶を共に苦しむと云ふ氣持から來たものであつて、之は大なり小なり日本人の全部が持つてゐるものと思つてゐたのに、私の選つた人々には、殆んどその片鱗さへも見られない様に思へたのである。

物と、金と、治安と三つの面から苦しい生存と戦ひ續けてゐる北支では、生活が必然的に之とは變つてゐた。日本よりは物がある。暮らしたいと云はれれば、内地に對して申譯ない考へて、凡ゆる生活面に自制を加へてゐたのだが少くとも「物のなさ」は東京に關

する限り北京の方が甚だしい。もう半年以上、總局の人々は一日一食しか飯を食はない。朝は大體パン、晝は麵と饅頭、夜が飯なのだ、それも外米(眞黒)と挽割麥の不味い飯だ。我々は、でも成る可く不平を云はず、酒や宴會も控えて互ひに自制の生活を遂つて來た。着物も住む家も皆んな不自由になつて來るのだつたが、どんな事があつても不平を云ふまいと誓ひ合つて來た。

内地が足りないといふ言葉と、前線の人々の苦勞が常に身近に感じられて、フラ／＼と何の決意も實行もない生活を送る氣になれなかつたからだ。その内地の不足が考へてゐた程でなく、更にその不足に對する不平の方がより大きいのを知らされた時、私が悲痛と憤懣に驅られたのは不可ないのだらう。本社社を見ても儉約の方針がどれだけ徹底してゐるか疑問になつた。我々が使つてゐた紙は殆んど印刷したもの、裏だし、鉛筆は持てなくなつた程短くなつたのをクリップに挟んで使ひ、近い仕事は徒歩と洋車で間に合はせてゐた。氣のつかない人達が水洗便所の水を出した儘にしてあるのを見つけると、御互ひに注意してそれを止める事迄した。既に何の爲の戦争?等と疑ふ時代は過ぎ、我々の生存自身の爲に闘ふ時代が來てゐるのではなからうか?

勿論北支だつて料理屋は繁昌だし、見てゐる丈でも不快な浪費はいくらでもある。しかし我々は之等の不愉快と戦ひ、何とかして之を克服し、新しい生活態度を築き上げようと努力してゐたのだし又北京全體としては少くともそんな氣運が、眞剣に醸し出されてゐる事をよく知つてゐたのである。之は支那の人々が、常に最低限の生活に堪え、萬事に足らず勝ちな我々大陸の日本人と比べても數倍、いや數十倍の困難に對して、黙々と戦つてゐる姿を目前に見てゐたからであらう。

新生活運動の片鱗は今でも残つてゐる。街を質素な藍衣を着て歩いてゐる男女の顔には少しのひげ目も見られなかつたし、洋車をさへ使はずに自動車用を足す若い青年達の姿は常に濶濶としてゐた。今我々が銀座に見る様な情ない風俗は少くとも北支の支那人には見られないものだつた。日本には餘裕がある。戦時下の東京には、どこに戦争があるかと思はれる位の餘裕がある……と言ふ言葉は既に聞き飽きる程聞いた。全くその通り、だから私は憂慮と憤懣に胸悶させられるのである。訪日の支那人と、外人がこれを見て若しその餘裕に驚くなら、その人々は餘りに上すべりした旅行者だ。日本の戦争に對する熱意がすつかり歪んでゐるのだと受取つて呉れなければ幸だが……

古い友人の一人の我が將校が云つた言葉。我々は銃後かどうあらうと關はらない。慰問袋が來やうが來まいが、どうでもよいんだ。たゞ我々はこの戦争に勝つ事が必要だと思ふから戦ふんだ。死ぬ事は平氣だ。我々が死ぬ事が、支那の犬や豚が死ぬ事と同じであつても少しも氣にかゝりはしない誰がこんな悲壯な言葉を云はせるのだ!

我々は負けてゐる。我々は毛澤東の云ふ最後の勝利を絶対に確信してゐない。日本に留學した事のある者は、必死になつた時の日本の底力がどの位強いかを知つてゐるからだ。たゞ之は明白に斷言出来る。それは日本の大衆より重慶の市民の方が遙かに戦争について眞剣であると言ふ事だ。この状態が續く限り日本が確信を持つて中國に勝つて云ひ切れるか?

誰がこんな放言を云はせ、しかも私に一言の辯明をする事も出来なくしてゐるんだ! 我々は困難と缺乏に堪える代りに、新らしく汚濁と侮辱とに堪えねばならぬのか?

私のこの感想は、自分が十餘回の戦争を経験してゐるが故に歸還兵のそれと相通するものがある様に思はれる。だから歸還兵の問題も併せて考へねばならないと思ふのだ。幾萬の歸還兵が、私と同じ様に悲憤する様な状態が何時迄續けられるのだらう。

歸京のこの粗雑な印象が、苦惱に満ちた北支生活の爲に、歪んでしまつた精神から發したものであら幸である。(五・三〇)

前號で紹介した調査部の資料整備の仕事も、各方面の御協力の下に着々進行し、圖書雜誌類の充實に加へて、毎日の新聞記事切抜も昨年十月以降の分まで選及整理を終つた。左に當部その後の活動状況を報告して、御利用と御協力を再び切望する。

五月十五日に第一號を發行した『資料週報』は引き続き二十二日

第二號を發行、今後毎週水曜日に定期發行の豫定である。第一號には當調査部(新館)現存の圖書目録を掲載した、第二號には本社各部及當調査部に毎月到着する國內定期刊行物(雜誌・月報類)の目録と、五月一日以降十八日まで發行された雜誌類の掲載論文目録を載せた。第三號には本社各部に到着する外國雜誌目録を載せ、近い將來に本社各部現存の圖書目録を複製掲載、これによつて本社全體に現存する圖書の毎月到着する内外定期刊行物の目録を完了する計畫となつてゐる。

内外定期刊行物の論文目録は毎週土曜日に到着の分までを即刻掲載する管で(現に五月二十二日發行の第二號には十八日發賣の綜合雜誌の分も載つてゐる)且つ週報であるから、この資料目録としては最大の利用價值があるものと自負してゐる。

資料週報は目下本社各部へ一部宛配布してゐるが、特に御希望の向は申込まれた。

◎今月の調査依頼状況  
活動開始一ヶ月なので大きなこと云へないが、調査依頼が未だ甚だ少く、部員一同脾肉の嘆に堪えない。数字を上げて見ると、五月一日より二十二日までの調査依頼總件數五十二、内、電話問ひ合せ四十四、切抜貸出八。各部別の利用状況を見ると社會部が三十八、政治部三、その他外信、地方各一、出版、内經、商通、滿洲各一、となり社會からの問ひ合せも都新聞より二件、福岡日々新聞より一件となつてゐる。(當調査部内の經濟週報編輯係りの資料利用は以上の数字から除外した)

解答成績は右の電話問ひ合せ四十四件は即答(五分以内)三十四件、所要時間二十分以内六件、調査不能のもの四件であつた。

◎林柏生氏の來部  
來朝中の中國答禮使節一行の宣傳部長林柏生氏が去る二十三日來社の折、當部を參觀された。松本編輯局長の案内で室内の圖書や切抜ケースの集積に、流石文人らしい批評眼をテラ／＼と走らせて行つたが、人物カードの棚の所で松本局長の咄嗟の思ひ付きに部員が林氏のカードや最近の寫眞入り記事切抜を出して見せると、同氏は相恰を崩して大喜び、當部は當部でオビチュアリー完備の程にちよつと鼻を高くした。

圖書利用の方は、貸出總件數四十六件、各部別利用状況は、特信二十二、社會二、寫眞四、出版四、政治二、その他となつて居り内容は歐洲大戰の關係から歐洲地名辭典地誌、地圖が壓倒的に多かつた。

◎問ひ合せの形態  
當調査部利用の足しまでに、どんな様式で問ひ合せが來るか、左に例を掲げて置く。資料その他未だ々々不備とはいへ、専門に調査の仕事をやつてゐると、相當の難問にも解答出来るもので、どし／＼問ひ合せを發して頂きた

(例)  
△某人物(又は某事件)の戦死は何月何日か(社會部)  
△某人物は學位を持つてゐるか(政治部)  
△樞密顧問官親任の辭令形式如何(政治部)

△前歐洲大戰當時英佛軍に從軍せる日本の武官は誰か(社會部)  
△大藏次官の聯銀券に對する意見如何(社會部)  
△ベルギーの王立地理學會ほどの程度の權威があるか(滿洲部)

◎利用を望む  
調査部

前號で紹介した調査部の資料整備の仕事も、各方面の御協力の下に着々進行し、圖書雜誌類の充實に加へて、毎日の新聞記事切抜も昨年十月以降の分まで選及整理を終つた。左に當部その後の活動状況を報告して、御利用と御協力を再び切望する。

五月十五日に第一號を發行した『資料週報』は引き続き二十二日

第二號を發行、今後毎週水曜日に定期發行の豫定である。第一號には當調査部(新館)現存の圖書目録を掲載した、第二號には本社各部及當調査部に毎月到着する國內定期刊行物(雜誌・月報類)の目録と、五月一日以降十八日まで發行された雜誌類の掲載論文目録を載せた。第三號には本社各部に到着する外國雜誌目録を載せ、近い將來に本社各部現存の圖書目録を複製掲載、これによつて本社全體に現存する圖書の毎月到着する内外定期刊行物の目録を完了する計畫となつてゐる。

内外定期刊行物の論文目録は毎週土曜日に到着の分までを即刻掲載する管で(現に五月二十二日發行の第二號には十八日發賣の綜合雜誌の分も載つてゐる)且つ週報であるから、この資料目録としては最大の利用價值があるものと自負してゐる。

資料週報は目下本社各部へ一部宛配布してゐるが、特に御希望の向は申込まれた。

◎今月の調査依頼状況  
活動開始一ヶ月なので大きなこと云へないが、調査依頼が未だ甚だ少く、部員一同脾肉の嘆に堪えない。数字を上げて見ると、五月一日より二十二日までの調査依頼總件數五十二、内、電話問ひ合せ四十四、切抜貸出八。各部別の利用状況を見ると社會部が三十八、政治部三、その他外信、地方各一、出版、内經、商通、滿洲各一、となり社會からの問ひ合せも都新聞より二件、福岡日々新聞より一件となつてゐる。(當調査部内の經濟週報編輯係りの資料利用は以上の数字から除外した)

解答成績は右の電話問ひ合せ四十四件は即答(五分以内)三十四件、所要時間二十分以内六件、調査不能のもの四件であつた。

### 大統領選挙の

#### 臺所のぞき

紐育支局 小糸生

迫り来る大統領選挙を臺所の方からのぞいて見よう。米國でも選挙運動はまづ其の費用捻出策に始まる。これまでのやうに、選挙費寄附に對し制限がつけられていないと必然的に無理な金策も行はれ、選挙、政治の淨化を期し難い。これが今議會でバンクヘッド上院議員が「政黨に對し年五萬弗以上の選挙費を寄附せる者は五萬弗以上の罰金五年以上の懲役に處せらるべし」といふ法案を提出した理由である。

顧みると、二大政黨たる共和民主黨の選挙費は實に驚くべき巨額に昇り、一九三六年度大統領選挙戦には共和黨は八百八十九萬二千弗、民主黨は五百六十萬一千弗といふ龐大な運動費を費した。之に

對し、外部から受けた共和黨民主黨の寄附額は夫々七百七十六萬一千弗及び五百二十萬五千弗で、何れも選挙費全部を賄ふには充分でなかつたので、他方面で色々と算段が行はれたわけだ。

民主黨ではさきにジャクンデ一晚餐會を開き、華府に於いては百弗、地方に於いては七十五弗といふ莫大な會費を徴收し、赤字埋めを圖つたか、かうした種類の収入は五六百萬弗の運動費に比べれば大海に一滴といふ程微々なものであつて、黨としてはどうしてのもつと手廣く寄附を仰がねばならない。此處に政黨の儲みがあり華府の所謂「壓力團體」(プレッシャー、グループ)が議會を繞つて幅を利かせてゐる原因である。

壓力團體とはいはゞ、議會組織外の議會組織で、經濟、實業、社會諸團體の代表者連が、華府で絶えず議員に懇願し之を監視し、時には之を指導してゐることは周知の木宗雄(同)二十二票原弘雄(同)二十二票荒尾達雄(同)以下略

### 同盟職員健保組合

同盟通信社は今回制定の職員健康保險法に基き組合員たる被保險者の健康保險を管掌する目的を以て同盟通信社職員健康保險組合を結成事務所を本社内に設置六月一日より業務を開始した。右に關して被保險者側より選出すべき組合會議員の選挙を二十五日執行した結果は左の通り確定した。

- 第一選挙區東京本社管轄(定員五名) (本社青森札幌函館仙臺桐生足利横濱新潟長野岡谷甲府各支局) 四十九票一ノ瀬博(本社) 四十八票平山清(同) 四十五票田浦義光(同) 四十四票山田清一郎(同) 三十八票山本憲吾(同) 以上當選 三十三票伊澤洋介(本社) 三十三票久木田大二(同) 三十二票若崎崎(同) 二十五票伊藤太二(同) 二十三票鈴木(關門) 以下略

### 憲兵學生見學

陸軍憲兵學校學生三十名は二十一日午前十時同校幹事木下榮市氏

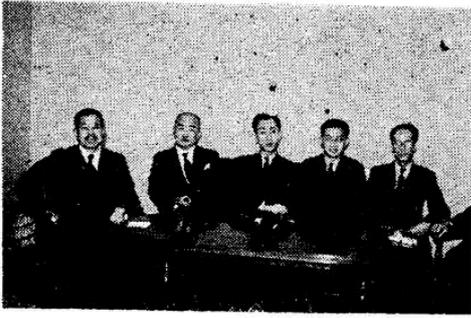


事實で、これが選挙費調達の際かなり役に立つてゐるといふ事だ。例へば一九三六年度の選挙戦に於いては民主黨米國領夫労働同盟及びCIO中央同盟より五十萬弗の寄附を受けて居り外に各五萬弗以上の寄附者百七十名を算してゐる。又共和黨では化學工業王國デューボント家十三名より五十一萬七千七百七十弗、投資王國ロックフェラー家五名より十六萬三千弗、石油王國ビュー家五名より三十一萬二千弗、新聞王ハースト氏より五萬弗等を受納し、外に七萬一千人の寄附者の中二百七十五名が五萬弗以上を寄與した。

右の數字に依つても明かであるが、共和黨の方が民主黨より財政的に熱心な支持者をもつてゐるので、若しバンクヘッド法案が實施せられるやうな場合には共和黨は選挙費捻出に一大痛撃をうける事になり、選挙に多少の番狂を生ずるのではないかと見る向きがある

### 中華記者團來訪

國民政府答禮使節團に隨行來朝した中華記者代表團中央電訊社張



昭銘、南京新報泰墨、中華日報穆時英、中華日報周雨人四氏は二十一日午後三時同盟本社に來訪社長室に於て古野社長、島山常務、岡村編輯局長、横田東亞部長らと懇談社内を見學同夜東京會館の同盟招宴に臨んだ。(寫眞は記念撮影)

### 林柏生氏來社

國民政府答禮使節團宣傳部長林柏生氏は隨員宣傳部秘書鍾任壽氏を同伴二十三日午後三時同盟本社に來訪社長室に於て古野社長、松本編輯局長らと懇談の後社内を見學夕刻辭去した。(中央黑服が林氏)

### 互助會報告

(五月)

- 結 婚  
 齋藤多喜子(同整理部)同 藤田 義昌(同) 上同  
 櫻井 繁喜(名古屋支社)同 眞岡 浪江(福岡支社)同  
 石渡 武雄(本社地方部)同 松本 清(横濱支局)同  
 橋口 義雄(大阪支社)同 岡本 正一(同上) 上同  
 岡本 正一(同上) 上同  
 光田 稔(關門支局)同 岸 芳一(大阪支社)夫人病氣  
 佐藤 武夫(本社經理部)祖父死去  
 退 社  
 田中 アサ(本社外經部)  
 榎田 治三(福岡支社)  
 熊谷 正己(京城支局)  
 野見山熊夫(神戸支局)  
 岸本 幸吉(大阪支社)  
 梶谷八州雄(本社內經部)  
 松岡 政行(關門支局)  
 澤口 ふく(本社庶務部)



### 噫！青木幹一君

編輯局社會部員青木幹一君は五月十八日午前九時四十五分卒然として逝つた。享年二十九、餘りの突然に今でも尙信じられない程だ。東京高校から京大國文科を昭和十一年卒業翌年五月同盟入社、社會部勤務となり、逝く迄の満三ヶ年に警察廳警備を始め警視廳宮内省鐵道省大藏省厚生省を歴兼任その何

れの記事俱樂部でも日淺くして彼程他社の人々に愛され、役人の信望を得た人間も珍らしかつた。部内の敬愛は無論の事だつた。眞面目過ぎる程の眞面目さ、純真過ぎる程の純真さ、頑固な顔つきと一寸女性的な聲、極端なほにかみやで無口、云はゞ影の薄すかるべき彼の印象が、いまこんなに逆強く胸に生き返つて來るのはどうしたことだらうか。結局純粹に貫き通した彼の性格であつたのだ。社會部三年の生活にも、持つて生れた生地そのものは、どう染りやうも無かつたのだ。一端仕事に向つたが最後、恰で見違へるやうなフェイスと頭頂りを示したのも此の生地の現れたつたらう。

同盟人事

(四、一〇一四、二三)

△辭令

經濟局內經部長 小松 利一  
 經濟局商運部長兼務ヲ命ス  
 經濟局商運部長 永松泰次郎  
 經濟局商運部長 長林 密藏  
 經濟局參事ヲ命ス  
 (五月一日附各通)  
 名古屋支社 成田 周  
 經濟部長  
 橫濱支局長ヲ命ス  
 橫濱支局長兼 岡崎幸次郎  
 經濟局參事  
 名古屋支社 中井 尙明  
 商況主任  
 名古屋支社 津田榮太郎  
 北支總局 八木 久  
 通信局放送部  
 廣東支局通信主任ヲ命ス  
 通信局放送部  
 廣東支局長ヲ命ス  
 華盛頓支局長 加藤萬壽男  
 總務局勤務ヲ命ス  
 華盛頓支局長 安保 長春  
 紐約支局長 長春  
 華盛頓支局長事務取扱ヲ命ス  
 (五月十日附各通)  
 信局地方部 丸山 信也  
 編輯局調查部勤務ヲ命ス  
 (四月廿五日附)  
 總務局經理部 片山 和衛  
 勤務社員  
 編輯局政治部勤務ヲ命ス  
 (五月一日附)  
 廣東支局長 牛島 俊作  
 編輯局東亞勤務ヲ命ス  
 (五月十日附)  
 通信局放送部 猪股 芳雄  
 次長  
 編輯局東亞部 酒井 忠俊  
 勤務社員  
 北支總局勤務ヲ命ス

(五月四日附各通)  
 橫濱支局 田中 功  
 勤務社員  
 編輯局社會部勤務ヲ命ス  
 編輯局社會部 葛野信太郎  
 勤務社員  
 橫濱支局勤務ヲ命ス  
 (五月十日附各通)  
 青森支局 田澤峰次郎  
 勤務社員  
 函館支局勤務ヲ命ス  
 (四月廿三日附)  
 名古屋支社 服部 梅治  
 勤務准社員  
 長野支局勤務ヲ命ス(五月一日附)  
 關門支社勤務 内尾 清  
 准社員  
 松山支局勤務ヲ命ス  
 (四月三十日附)  
 福岡支社 岡崎 保  
 勤務社員  
 大分支局勤務ヲ命ス  
 大阪大社 蟻正 育能  
 勤務社員  
 富山支局勤務ヲ命ス  
 (四月廿五日附各通)  
 大分支局 高松 謙吉  
 勤務社員  
 京城支局勤務ヲ命ス  
 京城支局 龜井光太郎  
 勤務社員  
 大分支局勤務ヲ命ス  
 (五月七日附各通)  
 通信局地方部 境田 正二  
 勤務社員  
 京城支局勤務ヲ命ス  
 (四月廿五日附)  
 北支總局 齊藤 正躬  
 勤務社員  
 編輯局勤務ヲ命ス  
 中南支總局 小山 武夫  
 勤務社員  
 北支總局勤務ヲ命ス  
 (五月十日附各通)  
 大阪支社 石川 あき  
 勤務社員  
 名古屋支社勤務ヲ命ス  
 (五月二十日附)  
 編輯局政治部 田中正太郎  
 次長  
 支那(出張)ヲ命ス(五月十日附)  
 滿洲國通信社 小林 德寶  
 大連支社向社員  
 滿洲國通信社奉天支社(出向)ヲ命ス

滿洲國通信社奉天 石川 道別  
 支社出向社員  
 滿洲國通信社大連支社(出向)ヲ命ス  
 (五月一日附各通)  
 編輯局社會部 種井善二郎  
 休職社員  
 復職ヲ命ス(五月一日附)  
 中南支(出張中 松本 重治  
 (編輯局長)  
 本社(歸還)ヲ命ス(五月二日附)  
 中張中 田口 修治  
 出張中  
 總務局映畫 部ニユース主 任)  
 同(總務局映 畫部)攝影主 上田 勇  
 本社(歸還)ヲ命ス  
 (五月三日附各通)  
 總務局勤務 寺原 秀正  
 准社員  
 社員ヲ命ス  
 通信局放送部勤務ヲ命ス  
 (五月一日附)  
 編輯局特信部 池田 純一  
 勤務社員試用  
 編輯局外信部 石井 卓朗  
 勤務社員試用  
 同 高橋 武雄  
 同 大橋 傳  
 同 今城 佳夫  
 同 中村 弘良  
 同 高松 義一  
 同 金 鎮 琪  
 同 西里 龍夫  
 同 中村 忠吾  
 同 小糸 忠吉  
 同 利直  
 同 岡山 包  
 同 江藤 隆夫  
 同 佐藤 太郎  
 同 植田 豐子  
 同 三好 榮

神戶支局勤務 胡田 吉通  
 准社員  
 准社員ヲ命ス(三月廿八日附)  
 鹿兒島支局勤務 山下惠美子  
 准社員試用  
 同 吉井ふみ子  
 准社員ヲ命ス(五月一日附各通)  
 同 田中三之助  
 准社員試用、總務局人事事務ヲ命ス  
 (五月一日附各通)  
 同 巖 俊緒  
 准社員試用、總務局出版勤務ヲ命ス  
 (五月一日附各通)  
 同 荻田 定雄  
 准社員試用、大阪支社勤務ヲ命ス  
 (五月三日附)  
 同 宮下 正一  
 准社員試用、大阪支社勤務ヲ命ス  
 (五月十八日附)  
 同 玉木幹太郎  
 准社員試用、名古屋支社勤務ヲ命ス  
 (五月三日附)  
 同 桑田 順平  
 准社員試用、岡山支局勤務ヲ命ス  
 (四月廿四日附)  
 同 唯井 修藏  
 准社員試用、天津支局勤務ヲ命ス  
 (五月七日附)  
 同 久代きよ子  
 准社員試用、總務局庶務部勤務ヲ命ス(五月一日附)  
 同 橋本 愛子  
 准社員試用、總務局庶務部勤務ヲ命ス(五月七日附)  
 同 小澤ミチ子  
 准社員試用、總務局庶務部勤務ヲ命ス  
 同 辻内 綾子  
 准社員試用、總務局庶務部勤務ヲ命ス(五月十三日附各通)  
 同 山田 裕子  
 准社員試用、總務局庶務部勤務ヲ命ス(五月九日附)  
 同 大久保隆正  
 准社員試用、大阪支社勤務ヲ命ス  
 (五月十八日附)  
 同 大脇 芳子  
 准社員試用、名古屋支社勤務ヲ命ス(三月二十日附)  
 同 平野 隆  
 准社委試用、名古屋支社勤務ヲ命ス(四月一日附)

中村 京子  
 准社員試用、中南支總局勤務ヲ命ス(四月十五日附)  
 伊藤 永止  
 編輯局寫眞部ノ事務ヲ囑託ス  
 川江久太郎  
 總務局出版部ノ事務ヲ囑託ス  
 (五月一日附各通)  
 編輯局調查部 高見 達夫  
 勤務社員  
 滿洲國通信社 船越 武十  
 勤務社員  
 滿洲國通信社 田中マサ子  
 勤務社員  
 經濟局外經部 田中マサ子  
 勤務社員  
 通信局技術部 松本 太信  
 勤務社員  
 兼航空部勤務  
 依願解職(四月二十日附各通)  
 大阪支社勤務 酒井進太郎  
 勤務社員  
 依願解職(四月廿一日附)  
 大阪支社 猿田 安美  
 勤務社員  
 鈴木 孝省  
 勤務社員  
 京都支局 竹村 愛子  
 勤務社員  
 名古屋支社 栗本太郎左衛門  
 勤務社員  
 大阪支社 岸本 幸吉  
 勤務社員  
 依願解職(四月廿五日附各通)  
 關門支社勤務 松岡 政行  
 勤務社員  
 休職期間満了ニ付退社  
 (四月三十日附)  
 通信局技術部 伊藤 永止  
 勤務社員  
 保定支局勤務 西田 三二  
 勤務社員  
 經濟局商況部 山本 茂久  
 勤務社員  
 神戶支局勤務 野見山龍夫  
 勤務社員  
 岡山支局勤務 佐賀 秀夫  
 勤務社員  
 神戶支局勤務 鶴瀨 一郎  
 勤務社員  
 釜山支局 高橋 謹爾  
 勤務社員

經濟局勤務 入交 貞  
 准社員試用 吉田 正男  
 總務局勤務 鈴木 進  
 准社員試用 森 健  
 通信局英文 部囑託 森 健  
 依願解職(四月三十日附)  
 經濟局內經部 梶谷八州雄  
 勤務社員  
 依願解職(五月四日附)  
 中南支總局勤務 酒見 光七  
 社員試用  
 依願解職(五月十一日附)  
 總務局勤務 澤口 ぶく  
 准社員  
 編輯局寫眞部 菊地長五郎  
 勤務社員  
 同 大塚 良一  
 依願解職(五月十三日附各通)  
 關門支社 山本 啓式  
 勤務社員  
 依願解職(五月十四日附)  
 經濟局勤務 多門 正吉  
 社員  
 總務局庶務部 吉川 とき  
 勤務社員  
 依願解職(五月十六日附各通)  
 編輯局社會部 青木 幹一  
 勤務社員  
 死亡(五月十八日)  
 北支總局華文部次長 鈴木幸次郎  
 五月一日東京發社任  
 慶祝使節として南京訪問中の處二日朝歸朝  
 編輯局長 松本 重治  
 中南支(出張中の處)二日歸京  
 南京支局長 大平 安孝  
 事務打合せの爲め五月六日來社  
 名古屋支社長 吉川 義章  
 事務打合せの爲め五月十五日來社  
 福岡支社長 麻野 林策  
 同上五月十六日來社  
 廣東支局長 市川 太郎  
 五月十七日東京發社任  
 大阪支社編輯部長 近藤 公一  
 事務打合せの爲め五月二十四日來社  
 社長 古野伊之助  
 五月廿五日東京發新報

消息